

倫理 第1回「青年期① 人間性の特質と青年期」

○今回のポイント

第1章 青年期の意義と自己形成

1章 - ①人間性の特質 (教科書 p.6~)

人間とは何か。理性的な存在

(1)倫理を学ぶ目的

倫理とは何を学ぶ科目なの？



「私」とは何か。なぜ生きるのか。そもそも人間とは何か。



①を見出す！

(2)人間とは何か？

人間と他の動物は何が違うの？ →火、言葉、道具、文化、etc... →人間には②がある！

人間とは何か！？	唱えた人	備考
<u>③</u> (知性人)	リンネ	秀でた知性をもつ動物
ホモ・ファール(工作人)	<u>④</u>	物質的・精神的創造と工作を本質とする
アニマルシンボリクム(象徴的動物)	<u>⑤</u>	事実だけでなく象徴で世界を捉えられる
<u>⑥</u>	ホイジンガ	理性は「遊び」を通して発達

複雑で多面的な人間存在

(1)理性と本能

人間は理性を持っているが・・・動物としての側面ももっている。

(2) パスカル 『パンセ』

・⑦…人間は偉大さと悲惨さ、無限と虚無の二面性を持ち、その中間を揺れ動く存在であること。



・⑧…死・孤独・無知等の悲惨さから目を背け、遊びや娯楽に熱中して気を紛らわせようとする



・「人間は考える葦である」…大きな宇宙の中で孤独で無力な人間が、宇宙における自分の悲惨な存在について考えるとところに偉大さを持つ。

(3)⑨ 『罪と罰』、『カラマーゾフの兄弟』など

・自己の内面の矛盾を見つめる近代的な人間の苦悩を描く

・理性だけでは図ることのできない人間存在の複雑さ

→「計算通りにすべてが動くのだったら自分の意志などないではないか」(『地下室の手記』より)

新たなる誕生

(1) 青年期…14、15 歳から 24、25 歳ごろまでの時期

○アリエス：フランスの歴史学者

- ・「⑩」…ヨーロッパ中世には「子ども」の存在はなく、労働力を供給する「小さな大人」として扱われた。中世末期～17 世紀末ごろにかけて「大人」と区別される「子ども期」が誕生した。

○ルソー：フランスの啓蒙思想家。社会契約論でも登場。

- ・「⑪」：一度目は生物的な誕生をし、二度目は精神的な誕生をすることのたとえ。
「われわれはいわば二度生まれる。一度は生存するため、二度目は生きるために。一度は人類の一員として、二度目は性をもった人間として」

(2) ⑫…12～13 歳頃から思春期に入ると、性ホルモンの働きが活発になり、男性または女性らしい身体の特徴があらわれること。生まれつきみられるのが第一次性徴。



他者の視線を意識・自分の性格や容姿について他者からの評価を気にする・自分の将来に不安



☆既成の価値観に反発することでしか、自分自身を証明することができない！☆

- ・自分の意見を強硬に言い張る、大人に反抗、自分の内に閉じこもる、社会規範に反する服装・頭髪・行動
- ・「⑬」…「大人へ成長することを拒む男性」。年齢的には大人でも、人間的・精神的に未成熟な男性を指す。ナルシズム・他者依存・社会的無責任・既成の価値観への反抗が特徴。
- ・「⑭」…自立できない女性が、シンデレラのように、理想の男性が現れて幸福にしてくれるのを待つ心理。

(3) 親からの自立

- ・「⑮」…青年期に親の保護や監督から離れて、一人一人の人間として精神的に自立すること。
- ・「⑯」…思春期におこる反抗。自我のめざめとともに自己主張や自分を認めて欲しいという欲求が高まるので、周りの大人との考え方のズレを感じ、大人の無理解や抑圧的な態度への違和感やいらだちが反抗的な態度となる。

(4) 大人と子どもの境界

- ・「⑰」…複数の社会集団や文化の周辺や境界線上に位置し、そのいずれにも属さない人々のこと。⑱は青年期が児童期と成人期の間に挟まった時期であり、どちらにも属さない中間の存在であることから青年を境界人と呼んだ。

自己を見つめる

- ・「⑲」…他者とは異なる唯一の「私」として自己の存在や人生の意味を考え始めること。



・人間の自我と⑳ G.H.ミードの役割取得

- ① 人間の自我は他者とのコミュニケーションを通じて形成される
- ② 他者との関係では、自分が他者から期待されている行動を取ることが求められる
- ③ 自分の行動を他者の期待に沿って調整できれば、他者との円滑な相互作用が可能になる
- ④ 「㉑」からの自分に対する期待（役割）をも内面化していく
- ⑤ 社会のなかで生きていくことが可能になる